

総合科目「災害復興支援学」

総合科目「災害復興支援学」は、東日本大震災・東京電力福島第1原発事故の翌年の2012年度に開講され、今年度で10年目を迎えることになった。

この授業では、これまでのFUREの災害復興支援活動から得られた知見（実践知・支援知）を学ぶことをつうじて、①震災・原発事故によってどのような被害・問題が発生し、その後どのように変化していったのか、②さまざまな支援活動によってどのような成果が生まれ課題が残っているのか、を理解し、③履修者が自分自身の興味や専門分野に引きつけて「復興とは何か」「支援とはどうあるべきか」を考え、行動に移すきっかけとすることを狙いとしている。

本科目は、FUREの体制変化に合わせ、2016年度からは半期（後期）の開講に改め、最初に数回の総論において各論の理解を深める授業形式とした。前担当の塩谷弘康氏の副学長就任にともない担当が菊地芳朗に替わった以外は、今年度も基本的に従来の担当者とスタイルを踏襲し開講した。

2021年度の講義のタイトルと担当者はつぎのとおりである。

- | | |
|------|---|
| 第1回 | ガイダンス・福島の間（菊地芳朗） |
| 第2回 | 原発災害と人間復興（山川充夫） |
| 第3回 | 東日本大震災で、ふくしまに起こったこと—大規模避難所運営の実際—
（天野和彦） |
| 第4回 | 原子力災害の影響—福島県の現状—（河津賢澄） |
| 第5回 | 原子力災害からの復興とまちづくり（川崎興太） |
| 第6回 | 放射能汚染からの食と農の再生を（石井秀樹） |
| 第7回 | 8年間の実態調査から見える震災後の南相馬市の産業復興（初澤敏生） |
| 第8回 | 復興期に求められるモビリティ・デザインの視点（吉田樹） |
| 第9回 | 原子力災害と法政策（清水晶紀） |
| 第10回 | 災害とその伝承（柳沼賢治） |
| 第11回 | 放射線教育について考える（山口克彦） |
| 第12回 | 学生のボランティア—福島大学災害ボランティアセンターを紹介しつつ—
（鈴木典夫） |
| 第13回 | 震災11年目の福島県農林業（小山良太） |
| 第14回 | 福島復興学（瀬戸真之） |
| 第15回 | 授業のまとめ（菊地芳朗） |

今年度の受講生は47名で、昨年度から大きく数を減らすことになったが、これはコロナ禍により受講者数が教室定員の半数に制限されたこと、および同時間帯に大規模授業が重なったことが理由と考えられる。また、授業は当初対面形式で始められたが、新型コロナウイルス感染症オミクロン株の全国的流行により、第15回授業が急遽遠隔方式に切り替えられることになった。

受講者の学類別では、人間発達文化学類 16 名、行政政策学類 7 名、経済経営学類 3 名、行政政策学類夜間主コース 3 名、共生システム理工学類 12 名、食農学類 5 名、現代教養コース 1 名であり、学年別には、1 年生 25 名、2 年生 15 名、3 年生 6 名、4 年生 1 名であった。1 年生が最多であるのは例年どおりであるが、2 年生以上とりわけ 2 年生が 3 割強を占めたのは、例年と異なる特徴といえる。

毎回の授業の最後には、出席確認を兼ねて「講義を受けて感じたこと・考えたこと」と「質問など」を書いてもらい、最終回に全体の感想を把握するため授業アンケートを実施した（回答者は 43 名）。それによれば、「授業の内容・レベルは適切であったか」については 5 点満点中 4.65（2020 年度 4.61）、「授業に満足したか」については 4.56（同 4.50）と高かった。さらに、この授業を受けて自分がどう考えたかについては、下表のような結果になった。

	あてはまる	ややあてはまる	どちらとも言えない	ややあてはまらない	あてはまらない	平均※
被災地・被災者についてもっと知らなければいけないと思った	35	8	0	0	0	4.81
専門的な勉強を深めなければいけないと思った	19	19	5	0	0	4.33
被災地を対象とした研究を深めなければいけないと思った	24	14	5	0	0	4.44
関連する専門的な研究を深めなければいけないと思った	24	11	8	0	0	4.37
被災地などに関する情報収集の方法がわかった	16	19	7	1	0	4.16
被災者支援などに力を入れたいと思うようになった	29	12	1	1	0	4.60
生きていく上で災害にどのように対処するか考えることができた	33	9	1	0	0	4.74

※平均は「あてはまる」を 5、「あてはまらない」を 1 として得点化し平均したもの

これらのうち、「被災地・被災者についてもっと知らなければいけないと思った」「被災地などに関する情報収集の方法がわかった」「被災者支援などに力を入れたいと思うようになった」の 3 項目が昨年度をわずかに下回ったものの、他は昨年度を上回っており、なおかつ全てが 4 点台で非常に高い評価であったといえる。受講者の東日本大震災・原発事故への関心の高さが示された数字といえるが、一方で、受講者が例年に比べ少なかったことが非常に残念であった。

うつくしまふくしま未来支援センターは今年度をもって組織を閉じることになったが、本授業は、上記のような学生の高い評価を受け、現 FURE 教員および学内外の関係者の協力によって 2022 年度も基盤教育授業として継続されることが決定している。この授業を通じ、引き続き福島大学学生に、被災地の現状と課題を伝え続けていきたいと考えている。